

欽定英訳聖書における身体語彙 *Eye* を用いた慣用表現

盛 田 義 彦

On Idiomatic Expressions by Using Bodily Vocabulary in the Authorized Version of the Bible : *Eye*

Yoshihiko MORITA

Abstract

This paper deals with a bodily word *eye/s* in the Authorized Version of the Bible published in 1611. Our major discussion is on some set expressions having *eye/s* in them, their corresponding expressions in a few modern versions, and their origins. As a result I made several findings: there are a few idiomatic sentence patterns concerning *eye/s* which have their origins in the Hebrew original; there are a few idiomatic phrases concerning *eye/s* and most of them have their origins in the Bible, but one of them is not Biblical.

1. はじめに

聖書という宗教文書の中で人の体は非常に重要な意味を持っている。キリスト教徒によって構成される教会はキリストの体と呼ばれており (Romans 12:5)、キリスト教徒はひとりひとりが体の一部と考えられている (I Corinthian 12:14~27)。キリスト教徒それぞれに貴重な存在価値が与えられているがごとく、口、鼻、顔、目などの体の具体的な部分も聖書の中では重要な意味を持っている。

本稿では人体部位の一つである *eye* が欽定訳聖書、The Authorized Version of the Bible (以下 AV) のなかで慣用表現としてどのように使わ

れているのかを調査し、その表現が現代語訳に引き継がれているかどうか、その表現の源はどこにあるのかを探索してみよう。

2. 身体語彙の使用頻度

首から上の身体部分を表す語について、その使用頻度を Chadwyck-Healey 社が研究用に発売した CD を使って調べてみると以下のような数値がえられた。

Table 1 Frequency of bodily words above shoulders in AV

	Old Testament	New Testament	total
eye/s	571	109	680
mouth/es	410	82	492
face/s	416	73	489
head/s	395	79	474
eare/s	245	56	301
lip/s	89	4	93
lippe/s	58	3	61
tongue/s	117	35	152
haire/s	69	20	89
neck/s	11	0	11
neck/s	62	7	69
tooth	10	2	12
teeth	42	12	54
nose/s	16	0	16

上の表から、eye/s の頻度数が他の数値と比べて特に大きいことがわかる。なお、680 例はすべて名詞であり、動詞として使われた eye は皆無である。さらに、eyes はすべて複数であり、属格の用例を含んでいない。

3. Idiomatic Expressions

eye/s を含んだ文や語句の中から、広い意味で慣用と考えられるものを選び出し、eye が主語の位置をとる慣用文型、phrase の一部になっている慣用句、というグループ分けをして、それぞれ頻度の多い順に扱っていく。

なお、用例を探し出すに当たって、「慣用」の概念を次のように規定することとする。すなわち、頻度数が高く、読者の意識によく残ると考えられる文や語句、および、頻度数は低いが、一般によく知られた文や語句を慣用文型、慣用語句とする。ただし、慣用の程度については各訳版にどの程度採用されているかを見て判断することとする。

3.1. 主語の eye/s

主語の位置に eye/s が用いられる型をこの節で扱う。

3.1.1. eye/s see⁽¹⁾ NP

この慣用型の頻度を Table 2 に示しておく。

Table 2 Frequency of “eye/s see NP”

Old Testament (以後 OT)	New Testament (以後 NT)	Total
27	3	30 ⁽²⁾

上の表から用例の大部分は旧約部分にあることがわかる。OT から一例を取ってみよう。

(1) Psalm 139: 16 Thine eyes did see my substance

(胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。⁽³⁾)

ヘブル語原典ではどのように表現しているのでしょうか。

(2) עֵינֶיךָ רָאוּ גְלְמִי

(your eyes saw my embryo)

この原典を見れば、NP 部分の訳語の違いはあるが、AV の文はヘブル語に忠実な訳文であることが判る。

現代語の訳版はどのような英文にしているであろうか。AV を下敷きにした作られたやや保守的な The Revised Standard Version [1952] (以下

RSV)、学問的に評価の高いカトリック系の The Jereusalem Bible [1968] (以下 JB)、ファンダメンタリストあるいは福音主義を唱える人たちの間で普及している New International Version [1984] (以後 NIV)、人種間差別を善処しようとした Contemporary English Version [1995] (以下 CEV) などの訳版でそれを見よう。

(3) RSV Thy eyes beheld my unformed substance ; ...

(4) JB You had scrutinized my every action,

(5) NIV your eyes saw my unformed body.

(6) CEV but with your own eyes you saw my body being formed.

RSV では saw ではなく、saw と等価の beheld を用いているものの、この型は RSV、NIV の二つで維持されていると言える。保守傾向の強い両書ならではの現象である。このように現代英語でも生きていることから、この型はほぼ慣用と言ってよいであろう。しかしながら、eyes saw NP、すなわち、「目が～を見る」という表現が現代英語として多少不自然であることは JB や CEV がそれを避けていることから判る。

つぎに *The Oxford English Dictionary* (以下 OED) がこの型について何か記述しているかどうか調査したが、特別な項目は出てこない。しかし、OED が採取した用例の中にこの慣用型が一例入っている⁽⁴⁾。

(7) 1539 TAVERNER *Erasm. Prov.* (1552) 13 That the eye seeth not,
y^e herte rueth not.

このことから、AV の翻訳作業が始まるよりも 50 年以上前にこの型が英語にあったことが判る。Richard Taverner の著作とは言え、聖書学者の Erasmus を扱ったものの中の文であるから、Erasmus を通して英語に入った可能性はある。

一方、AV が翻訳の下敷きに用いた Bishops' Bible [1568] (以後 BB) ではどうだろうか。

(8) BB Thine eyes dyd see me

BB でも eyes を主語、see を述部動詞にした構文になっている。更に時代をさかのぼってみよう。Great Bible [1540] (以後 GB) ではどうだろうか。

(9) GB Thyne eyes dyd se my substaunce,

GB でもやはり同様の構文が使われている。更にさかのぼった Coverdale [1535] (以後 Co) ではつぎのようになっている。

(10) Co Thine eyes se myne vnparfitnesse,

Co でもこの型の構文が用いられている。さらに Tyndale (以後 Tyn) までさかのぼりたいのであるが、Tyn は Psalm を翻訳していない。そこで、翻訳のある Pentateuch, Jona, NT でこの型が使われているかどうか調べたが、用例は皆無であった。従って、Co の出版年すなわち 1535 年にはこの型が存在したことがわかる。この年は *OED* の採取例よりも数年前であり、Co の用例がこの慣用型の初出といえる可能性が強い。そうであれば、この慣用型の起源は聖書にあるということになる。

3.1.2. eye spare NP

この慣用型の頻度を Table 3 に示しておく。

Table 3 Frequency of “eye spare NP”

OT	NT	Total
9	0	9 ⁽⁵⁾

上の表から用例のすべてが OT にあることが判る。しかも、7 例がエゼキエル書からである。主語の位置を取る eye は単数のみで、複数の例はない。用例を見よう。

(11) Ezekiel 20 : 17 Neuerthelesse mine eye spared them

(それでも、わたしの目は彼らを憐れんで、)

つぎにヘブル語原典を見よう。

(16) עֲלֵיהֶם עֵינַי וְנָחַם

(them my eye spared and)

この原文から、AV は原典にそった訳文であることがわかる。

現代語訳ではつぎのようになっている。

(12) RSV Nevertheless my eye spared them,

(13) JB In spite of this, I took pity on them ;

(14) NIV Yet I looked on them with pity

(15) CEV Yet, I felt sorry for them

RSV では AV を引き継いでいる。NIV では動詞 look の中に eye の意義素を取り込み、eye を主語にしていない。JB も CEV もこの慣用型を用いていない。eye spare NP、すなわち、「目が～を見過ごす」が現代英語

ではもはや普遍性の低い構文であることは JB や NIV、CEV でこれを採用していないことから判る。なお、*OED* は見出し語 eye でも spare でもこの慣用型について何も記述していない。

つぎに、AV 以前の版ではこの型はどのようになっているであろうか

(17) BB Neuerthelesse mine eye spared them

(18) GB Neuerthelesse, myne eye spared them,

(19) Co Neuertheles myne eye spared the,

上記の 3 用例を見れば、この型が伝統的に用いられていることが判る。なお、Tyn にはこの型の用例がないが、Wyclif 1384 年版(以後 Wy₈₄、1395 年版は Wy₉₅) では次のようにこの型が用いられている。

(20) Wy₈₄ And myn eye sparide vpon hem,

Wy₈₄ では vpon が加えられているが、当該の慣用型に準じたものとなっている。なお、Wy₉₅ にもこの慣用型は複数個の用例がある。

結局、この慣用型、eye spare NP はヘブル語起源の Biblical expression であるが、現代英語での受容性は低いと結論できよう。

3.1.3. eye pity NP

この慣用型の頻度を Table 4 に記しておく。

Table 4 Frequency of “eye pity NP”

OT	NT	Total
5	0	5 ⁽⁶⁾

この慣用型も OT のみで使用され、NT には用例がない。すべて否定文である。一例を見よう。

(21) Deuteronomy 19: 13 Thine eye shall not pity him,

(彼に憐れみをかけてはならない。)

ヘブル語原典を見よう。

(22) עֵינְךָ עֵלָיו לֹא-תַחֲמוֹס

(him your eye shall pity not)

AV はヘブル語原典からの忠実な訳であることが判る。

現代語の訳版ではどのようにしているか見よう。

- (23) RSV Your eye shall not pity him,
 (24) JB You are to show him no pity.
 (25) NIV Show him no pity.
 (26) CEV Never show mercy to a murderer!

RSV は AV をそのまま引き継いでいるが、他の版は *eye* の意義素は無視して意識している。なお、*OED* はこの慣用型に関して何も記述していない。

つぎに英訳版をさかのぼって観察しよう。

- (27) BB Thine eye shall not spare hym,
 (28) GB Thyne eye shall not spare hym,
 (29) Co ..., thyne eye shall not pitie him,
 (30) Tyn Let thyne eye haue no pitie on him
 (31) Wy₈₅ ..., ne thow shalt haue mercy of hym;

Co は AV を支持しており、BB、GB は動詞を *spare* にしているものの、*eye* を主語にしている。

結局、この慣用型はヘブル語原典に源を持ってはいるが広く使われた表現形ではない。さらに現代英語ではこれを慣用として受け入れる余地は小さいと言えよう。

3.1.4. eye run down with tears

この慣用型の頻度を Table 5 に記しておく。

Table 5 Frequency of “eye run down with tears”

OT	NT	Total
4	0	4 ⁽⁷⁾

用例はすべて OT にある。一例を見よう。

- (32) Jeremiah 14: 17 Let mine eies runne downe with teares night and day,

(わたしの目は夜も昼も涙を流し)

「涙と共に目そのものまで流してしまおう」という強意表現である。

ヘブル語原典ではどのようなになっているのかをみよう。

(33) לַיְלָה וַיּוֹמֵם דְּמָעָה עֵינַי תַּרְדְּנָה

(day and night tears my eye let run down)

AV の訳文はヘブル語の忠実な訳であることが判る。但し、AV の with に相当する語はない。

現代語訳を見よう。

(34) RSV Let my eyes run down with tears night and day, ...

(35) JB Tears flood my eyes night and day,

(36) NIV Let my eyes overflow with tears ... ;

(37) CEV Tears flood my eyes both day and night,

「涙が流れる」という内容であるので、どの版も eyes と tears を用いているが、動詞に run を選択したものは RSV のみである。従って、現代英語にはこの慣用型を受容する余地は少ないと判断される。次に AV 以前にさかのぼってみよう。

(38) BB Mine eyes shall weepe without ceassyng day and nyght :

(39) GB Myne eyes shall wepe without ceassyng daye & nyght.

(40) Co Myne eyes shal wepe without ceassing daye & night.

BB、GB、Co のどれも同様の訳文であり、「目が泣く」という表現にして、動詞は weep を使い、run は使っていない。すなわち、AV 以前から AV 訳のように eyes run down という文は英語として不自然だと思われていた可能性が強い。なお、Tyn にはこの型の用例はない。また、OED の eye と run の部分にはこの型についての記述も用例もない。結局、この慣用型はヘブル語の表現に忠実に従おうとした AV やそれを模倣した RSV に特異なものであったといえよう。

3.2. 慣用句中の eye/s

本節では文の型ではなく慣用句の中で eye が用いられるものを考察していく。

3.2.1. the apple of one's eye

この慣用句の頻度を Table 6 に記しておく。

Table 6 Frequency of “the apple of one’s eye”

OT	NT	Total
5	0	5 ⁽⁸⁾

「瞳」を比喻で表すこの慣用句の頻度数は高くない。一例を見よう。

(41) Psalm 17: 8 Keep me as the apple of the eye, ...

(瞳のようにわたしを守り)

「『瞳』のごとくに守る」というのは他には代え難いものとして慈しむことを表現している。全用例(5例)のうちの4例が the apple of the/one’s eye の意味として「他には代え難いもの」を内側に持っている。残りの1例は文字通り「瞳」の意味で使っている。

ヘブル語原典を見よう。

(42) כַּאִישׁוֹן שְׁמַרְנִי

(pupil as keep me)

ヘブル語原典では全用例で「瞳」に当たる語を用いており、apple に当たる語は用いていない。

現代語訳を見よう。

(43) RSV Keep me as the apple of the eye; ...

(44) JB ... guard me like the pupil of your eye; ...

(45) NIV Keep me as the apple of your eye; ...

(46) CEV Protect me as you would your very own eyes; ...

保守傾向の強いRSVとNIVではappleを用いた慣用句を使っている。CEVはeyesを使用しているが、「瞳」の要素を省いた意識である。

OEDではこの慣用句の意味を二つに分けている。一つは「目の中央にある瞳」⁽⁹⁾で初出はKing Alfred、初出年はc885としている。もう一つは「最大の関心をもって慈しまれるもの」⁽¹⁰⁾で初出は同じくKing Alfredで初出年も同様c885である。

AV以前の様子を見よう。

(47) BB Kepe me as the apple of an eye, ...

(48) GB Kepe me as the apple of an eye, ...

(49) Co Kepe me as the apple of an eye, ...

BB から Co まで全く同じである。Tyn には Psalm の訳文がないが、訳文のある Deuteronomy 32:10 では as the apple of his eye としており、Tyn 以降現代語訳まで「瞳」を“apple of an/the/one’s eye”で訳すのが伝統となっていることが判る。以上のことから、この慣用句の源は古英語にあり、しかも、聖書には関係がないと判断できる。

3.2.2. eye for eye

この慣用句の頻度を Table 7 に記しておく。

Table 7 Frequency of “eye for eye”

OT	NT	Total
3	1	4 ⁽¹¹⁾

世の中に広く知られたこの慣用句はその知名度とは逆に頻度数は小さい。その用例は OT に 3 例、OT の引用による用例が NT に 1 例ある。一例を見よう。

- (50) Deuteronomy 19:21 ..., *but life shall goe for life, eye for eye, tooth for tooth,*

(命には命、目には目、歯には歯、)

今日の中東地域の紛争をイスラエル側、アラブ側双方が正当化する精神的基盤の一つになっているこの慣用句は、本来は裁判の結果として行われる処罰の方法であった⁽¹²⁾。

ヘブル語原典では次のようになっている

- (51) נֶפֶשׁ בְּנֶפֶשׁ עַיִן בְּעַיִן שֵׁן בְּשֵׁן

(tooth for tooth eye for eye life for life)

AV の but や shall goe にあたる部分は(51)では省略されているが、(51)で示した部分以前にはそれに当たる語がある。(50)では but の左側にある文に倣って AV の訳者が加えたものであるのでイタリックスで書かれている。従って、AV はヘブル語原典の直訳であることがわかる。

現代語訳を見よう。

- (52) RSV ...; it shall be life for life, eye for eye, tooth for tooth,
 (53) JB Life for life, eye for eye, tooth for tooth,

(54) NIV ...: life for life, eye for eye, tooth for tooth, ...

(55) CEV You will receive the same punishment ..., whether it means losing an eye, a tooth, ...

CEV は意訳をしており、この慣用句を用いていないが、他版は AV に倣っている。

OED はこの慣用句を Biblical allusions⁽¹³⁾ という項目を付して載せており、初出は Genesis から題材を取って書かれた *Cursor Mundi* で初出年を a1300 としている。

AV 以前の版はどのように訳しているであろうか、見てみよう。

(56) BB ..., but lyfe for lyfe, eye for eye, toothe for toothe, ...

(57) GR ..., soale for soule, eye for eye, toth for toth, ...

(58) Co Soule for soule, eye for eye, tothe for tothe, ...

(59) Tyn ..., but life for ife, eye for eye, toth for toth, ...

BB から Tyn まで少なくとも eye for eye については同じである。この慣用句は *Cursor Mundi* 以来、今日まで引き継がれている。そして、その源はヘブル語原典にあると判断できる。

3.2.3. the eye of a needle⁽¹⁴⁾

この慣用句の頻度を Table 8 に記しておく。

Table 8 Frequency of “the eye of a needle”

OT	NT	Total
0	3	3 ⁽¹⁵⁾

この慣用句の用例はすべて新訳部分にある。一例を見よう。

(60) Matthew 19:24 It is easier for a camel to go through the eye of a needle, ...

(らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。)

3 例とも同様の文脈で、しかも同様の文中でこの慣用句が使用されている。「針の目」とは「針に糸を通す穴」であると同時にその穴が小さいことから、Jerusalem の城壁に開けられた穴で、人がひとりやっと通れる小門をもこう呼んだと言われている⁽¹⁶⁾。

ギリシャ語原典を見よう。

- (61) ..., εὐκοπώτερόν ἐστιν κάμηλον διὰ τρυπήματος ῥαφίδος
(easier it is a camel through eye of a needle
διελθεῖν
to pass)

AV の訳文はギリシャ語の忠実な訳であることが判る。

現代語訳を見よう。

- (62) RSV ..., it is easier for a camel to go through the eye of a needle than
(63) JB ..., it is easier for a camel to pass through the eye of a needle than
(64) NIV ..., it is easier for a camel to go through the eye of a needle than
(65) CEV ..., it's easier for a camel to go through the eye of a needle than

どの版もこの慣用表現を使用している。

OED は「needle's eye の初出は 1579 年の Gosson にあるが、the eye of a needle の源は Tyndale だ」とのべている⁽¹⁷⁾。他方、naedle eaze は *Anglo-Saxon Gospels* (c1000) にあり、ezo nedles という属格を用いた形では *Lindisfern Gospels* (c950) に初出例があると記している⁽¹⁸⁾。

AV 以前にさかのぼって見よう。

- (66) BB ... : it is easier for a camel to go through the eye of a nedle, then
(67) GB ... : it is easyer for a camell to go through the eye of a nedle, the
(68) Co It is easier for a Camell to go thorow the eye of a nedle, the
(69) Tyn ... : it is easier for a camell to go through the eye of a nedle then
(70) Wy₈₄ it is ... *eysier*, a camel for to passe thorwz a nedelis eize, than

Wy₈₄ は属格を用いた表現になっているが、Tyn から BB までは皆同様に the eye of a nedle としている。結局、Tyn から現代語訳までこの同じ慣用句を使用してきたことが判る。

Shakespeare も用いたこの慣用句⁽¹⁹⁾ は西欧社会によく知られており、上記のように英語における源は古英語にあるものの、古英語にこの慣用句をもたらした基はラテン語聖書であり、これは更にギリシャ語聖書にさかのぼる。従って、この慣用句は完全に Biblical expression であると判断できる。

3.2.4. doves' eyes⁽²⁰⁾

この慣用句の頻度を Table 9 に記しておく。

Table 9 Frequency of “doves' eyes”

OT	NT	Total
3	0	3 ⁽²¹⁾

この慣用句の用例はすべて旧訳部分にある。しかも、3例とも The Song of Solomon にある。一例を見よう。

(71) Song 1: 15 ..., thou *art* faire, thou *hast* doves eyes.

(あなたは美しく、その目は鳩のよう。)

「鳩の目」とは「汚れのない、柔和な人のまなざし」を意味している。ヘブル語原典を見よう。

(72) יָפֶה עֵינֶיךָ יוֹנִים

(doves your eyes beautiful)

AV には原典に対応語のない *thou art*, *hast* を加えている。従って、原典に忠実な訳文ではない。更に原典では *doves' eyes* という修飾関係は明示されていない。

現代語訳を見よう。

(73) RSV ..., you are beautiful ; your eyes are doves.

(74) JB ..., how beautiful you are ! Your eyes are doves.

(75) NIV Oh, beautiful ! Your eyes are doves.

(76) CEV ..., so very lovely — your eyes are those of a dove.

RSV、JB、NIV は同様の訳文で AV よりも原典に近い構文にしており、*doves' eye* という表現を取っていない。CEV は意識して *eyes of a dove* に近い表現にしている。なお、*OED* にはこの慣用句について何の記述もな

い。

AV 以前にさかのぼって見よう。

(77) BB ..., Oh howe fayre art thou? thou hast doues eyes.

(78) GB Oh howe fayre art thou? thou hast doues eyes.

(79) Co ... how fayre art thou? thou hast doues eyes.

Co から BB まで同文であり、AV はこれらを引き継いだ訳文にしていることが判る。doves' eyes という collocation を現代英語の「慣用」という範疇に入れることは RSV 以降その例がないことから躊躇せざるを得ないが、16~7 世紀は「慣用」という名を使ってもよい状況が観察される。なお、現代英語には dove-eyed「優しい、柔和な目をした」という形容詞があり、この単語の土台として doves' eyes があったと推測することができる。

4. おわりに

本稿では欽定訳聖書中の eye/s を含んだ慣用文型および慣用句を選び出して、それぞれの文型や慣用句が現代英語に引き継がれているか、欽定訳以前の訳版からの引き継いだ表現か、その源はどこにあるか、ヘブル語・ギリシャ語原典にあるのかどうか、などを考察してきた。その考察は各慣用型について複数例の中から一例を取り出しておこなったので、残りの用例については多少の言及はしたものの、十分な考察はしていない。従って、上記の各節で行った考察には限界がある。しかしながら、聖書の各訳版は原典を尊重した上、それぞれの中で統一を保とうとする傾向が強いので一例を考察しただけでも、ほぼ全体像が捉えられるという長所がある。このような限界や長所をふまえた上で、上記の考察の結果を一覧表にまとめて本稿を閉じることとする。なお、表中の慣用度とは各慣用型がどの程度の広がりがあるかを表し、Biblical level とはその型の起源がヘブル語原典やギリシャ語原典にあると言えるかどうかの程度を示す。表中の記号は度合いの高低を表し、◎は非常に高い、○は高い、△は中程度、▲は低い、×はゼロを意味する。

欽定英訳聖書における身体語彙 *Eye* を用いた慣用表現

	起 源	Biblical level	慣用度	
			pre-AV	post-AV
1. eye see NP	ヘブル語	◎	○	▲
2. eye spare NP	ヘブル語	◎	○	▲
3. eye pity NP	ヘブル語	◎	▲	▲
4. eye run down with tears	ヘブル語	◎	×	▲
5. the apple of one's eye	古英語	×	◎	△
6. eye for eye	ヘブル語	◎	◎	○
7. the eye of a needle	ギリシャ語	◎	◎	◎
8. doves' eyes	ヘブル語	○	○	×

Notes

- (1) see の変化形、seeth, saw などの代表として see と表記する。他の慣用型の動詞についても同様である。
- (2) 用例箇所 Deu 3: 21, 4: 3, 4: 9, 10: 21, 21: 7,
Jos 24: 7, 1Sa 24: 10, 1Ki 10: 7, 2Ki 22: 20, 2Ch 9: 6, 34: 38,
Job 7: 7, 10: 18, 13: 1, 21: 20, 24: 15, 28: 7,
29: 11, 42: 5, Ps 35: 21, 54: 7, 92: 11, 139: 16,
Pr 25: 7, Isa 33: 17, 33: 20, Mal 1: 5, Lu 2: 30, 1Co 2: 9,
Re 1: 7.
- (3) 新共同訳、以後、聖書の日本語文はすべて新共同訳である。
- (4) *OED* entry for Eye I. 3.
- (5) 用例箇所 1Sa 24: 10, Eze 5: 11, 7: 4, 7: 9, 9: 5, 9: 10, 20: 17, Isa 13: 18.
- (6) 用例箇所 Deu 13: 8, 19: 13, 19: 21, 25: 12, Eze 16: 5.
- (7) 用例箇所 Lam 1: 16, 3: 48, Jer 9: 18, 14: 17.
- (8) 用例箇所 Deu 32: 10, Ps 17: 8, Pr 7: 2, Lam 2: 18, Zec 2: 8.
- (9) *OED* entry for Apple 7. “the pupil or circular aperture in the center of the eye
....”
- (10) *OED* entry for Apple 7. b. “Used as a symbol of that which is cherished with
the greatest regard.”
- (11) 用例箇所 Ex 21: 24, Lev 24: 20, Deu 19: 21, Mat 5: 38.
- (12) Deuteronomy 19: 16~21.
- (13) *OED* entry for Eye I. 2. b.
- (14) “a needle's eye” を 1 例含む。

- (15) 用例箇所 Mat 19 : 24, Mar 10 : 25, Lu 18 : 25 (a needl's eye).
- (16) 『聖書辞典』 p. 372.
- (17) *OED* entry for Needle, I. 1. d.
- (18) *OED* entry for Eye, III. 20. a.
- (19) Shakespeare, *Richard II*, V. v. 17.; *Troilus and Cressida*, II. i. 87. など。
- (20) “eyes of doves”を 1 例含む。
- (21) 用例箇所 So 1 : 15, So 4 : 1, So 5 : 12 (eyes of doves).

References

- Biblia Hebraica Stuttgartensia*, (1997) Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart.
- The Bible in English*, (CD-ROM) (1996) Chadwyck-Healey Ltd., Cambridge.
- The Bishops' Bible*, A facsimile of the 1568 edition. (1998) Elpis Co. Ltd., Tokyo.
- The Holy Bible*, A facsimile of the Authorized Version published in the year 1611. (1982) Nan'un-do, Tokyo.
- The Holy Bible*, An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version Published in the Year 1611 (1985) Oxford University Press, Oxford/Kenkyusha, Tokyo.
- The Holy Bible, Revised Standard Version*, (1952) Augsburg Publishing House, Minneapolis.
- The Holy Bible, New International Version*, (1984) Zondervan Bible Publisher, Grand Rapids.
- The Holy Bible, Contemporary English Version*, (1995) American Bible Society, New York.
- The Jerusalem Bible*, (1968) Darton, Longman & Todd Ltd., London.
- Green, Jay P. Sr. ed. & tr., (1983) *The Interlinear Hebrew-Greek-English Bible*. vol. I~IV, Baker Book House, Grand Rapids.
- The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (1989) Oxford University Press, Clarendon.
- Davidson, Benjamin (1974) *The Analytical Hebrew and Chaldee Lexicon*, Samuel Bagster & sons Ltd., London.
- Strong, James (1982 repr.) *Strong's Exhaustive Concordance*, Baker Book House, Grand Rapids.
- 『聖書』新共同訳 (1987) 日本聖書協会、東京。
- 『聖書辞典』(1968) 新教出版社、東京。
- 田川建三『書物としての新約聖書』(1997) 勁草書房、東京。